ベトナムにおける小学校英語教育の現状と課題　～英語の必要性を鑑みて～

教科・領域教育専攻
国際教育コース　　指導教員　　石村　雅雄
米倉　隆平

1. 研究背景

近年、世界中でグローバル化が加速しており、地球を1つの個体として捉えている。その1つに英語が挙げられる。英語が国際共通語（公用語）としてさまざまな国際機関で使用されている。その影響により、英語を母国語として使用していない国々では英語教育が浸透し、英語を教科もしくは活動の位置付けで小学校に導入（必修化・選択）する国も現れている。しかし、ほとんどの国では、英語は第二言語もしくは外国語として学習しているのが現状である。日本も外国語として導入する国の1つである。日本では「外国語活動」の位置付けで行っており、授業としての意義やプロセスは教科として導入している国に比べると、実施する意図は変わってくる。そこで、筆者は2008年前後に教科として英語を導入した国をターゲットに調査していく中で、ベトナム社会主義共和国（以下、ベトナムとする）が挙げられ、その国を活動地として決定した。ベトナムは日本同様に、母国語だけで仕事や生活をすることが可能であり、いわゆる母国語が生活言語として機能している状況が挙げられる。しかし、英語を使用する環境は、観光地（観光都市）、対外とのビジネスや学校における英語による授業（中学校・高等学校・大学等）である。また、ベトナムが加盟しているASEAN(東南アジア諸国連合)は、国民国家としての成長を目指した経済成長を採用し、国際関係と国際協調を重視している。

2. 研究目的と課題

筆者は、上記のような環境にも関わらず、英語を使うメリットとは何か、なぜ英語を政府は導入しようと決定したのかという疑問が生じ、英語教育の制度及びその政策を考える必要があるに至った。課題は以下の通りである。

課題①小学校英語教育を導入する以前はどのようなものであったかを明らかにする。
課題②小学校に英語教育を導入した経緯を明らかにする。
課題③現在の小学校英語教育の立ち位置は何かを明らかにする。
課題④どのような目的を持って現場の教師は小学校英語教育を行なっているのかを明らかにする。

3. 研究方法

ベトナムにおける英語教育、特に小学校英語教育の実態を把握するために、それぞれの課題に対して以下の方法を用いた。

課題①文献調査
課題②文献調査
課題③アンケート調査、インタビュー調査、授業観察及び文献調査
課題④インタビュー調査、授業観察及び教科書分析

4. 結論

4つの課題に対しての答えを以下に述べる

課題①ドイモイ政策を機に、言語政策を英語に集中させていたが、小学校では、英語の授業はなく、教科として公式に実施されていなかった。ただし、一部の都市部では、小学校の教科として英語を導入している学校があった。

課題②国が市場経済開放へと転換され、他国と関わるようになった。そうした状況の中で、政府が2020年プロジェクトと呼ばれる外国語教育刷新を施した。国として外国語能力向上を目的とし、若年層から改革していく手前、小学校に英語を導入することとなった。

課題③英語が導入して早6年が経ち、ベトナム全土に小学校英語が広がっていること。国定教科書の誕生や大学時に英語を専門的に学習し、現在教壇に立っている教師がいる。こうした中、英語学習は段階を踏むことで、学習することができるようになるでしょう。だからこそ、小学校英語教育というのは、その先にある英語学習の地盤になるものであり、かつ多くの可能性を見出すことができる教科の一つとなっている。

課題④国の目標であるコミュニケーション能力を向上させて、この先の未来で、海外で活躍できる人材育成のために英語が必要な教科であると、教師は認識している。調査を通して、教師はコミュニケーションや4つのスキル(Writing, Listening, Reading, Speaking)を重要視していることがわかった。そのためにも、教師は授業に英語による歌遊び、ゲームやフラッシュカードを取り入れて、授業を行っている。また、教科書は海外に目を向けた内容を持ち、かつ4つのスキルを活かした構成となっている。

英語学習というのは、時代が変わるにつれて、重要になってきている。特に小学校英語教育においては、、若年層が英語に触れたり、親しんだりといった行動を図る最初のステップとして位置づいており、大変重要な学習機会である。しかし、いくら英語に親しんだところで、すぐに児童が英語を好きになったり、得意になったりとは考えにくい。これを補完するには、小学校教師の腕にあるのではないだろうか。その理由には、わけがある。会話文をペアで練習したり、教師が言った英文を児童が暗唱してみたりと、児童の主体性が発揮する授業になりつつあると考える。しかし、まだ一部では教師中心の授業が行われていることもある。また、コミュニケーション能力向上も国が求めている目標の一つであるため、文法や語彙の練習が中心の授業よりグループワークやペアワークを中心とする活動の授業がメインになりつつあると考える。さまざまな場面を想定した会話文や活動で授業が構成されている。

最後に、ベトナムという国は、英語の必要性を感じたから、総合的に判断して英語を小学校に導入した。導入したから、はい、終わりではなく、今後の行方に注目すべきである。また、改善すべき点は見られるため、今後日本のようなALT制度があれば、正しい発音や海外の面白い話を子ども達がきくことができる。早期学習している国の一つとして、小学校英語教育のみならず、全教育レベルでの英語教育が発展していくことを期待している。